

＝ コメディカル・レポート ＝

## 乳幼児虐待の早期発見に向けて

### —— 愛着形成が及ぼす新生児の体重増加への影響 ——

佐藤 弘美, 晴佐 久妙\*, 堀江 雅子\*\*  
齋藤 晃\*\*\*

#### はじめに

近年, 乳幼児虐待の報告が後をたたず, 虐待件数も平成9年度の5,352件から平成11年度は11,631件と2倍以上に増加している。また, 全国の被虐待児における0歳から3歳未満の占める割合は20.6%であり, 学齢前幼児を含めると約半数にのぼると報告されている。これら発生時期を考え, 周産期に関わる我々が早期に関与因子を見つけ, 対処することが必要である。

坂井聖二は, 虐待発見のサイン(表1)を挙げている<sup>1)</sup>が, 子どもに表れるサインとして, 体重増加が不良であることを指摘している。研究を進めていく中で, 1ヶ月健診時の体重増加が, 愛着形成に関連を示したので, ここに報告する。

#### 研究対象及び方法

2000年12月14日～2001年6月30日に当院で分娩した100例(初産婦50名 経産婦50名)につき34～35週時と1ヶ月健診時の2回チェック式(一部記述式)アンケートを手渡し外来回収ボックスにて回収し, 比較検討した。回収率44.4%, 平均年齢は30.6歳だった。

34～35週の妊婦に花沢氏の母性理念質問紙<sup>2)</sup>(表2)と, 分娩・育児の相談相手, 夫の家事協力及び不満, 計画的な妊娠だったか, 被虐待経験とそれに対する現在の心境, 心身の疲労, 経済状態など50項目をアンケート調査した。また, 産後,

児の体重増加, 育児に対する感情, 幼児・児童虐待に対する意見, 花沢式対児感情評定尺度(表3)など46項目につき2回目のアンケート調査をした。

#### 結 果

産後, 育児にあたりどんな感情を持つかの質問において「楽しい」と答えたプラス群と, 「辛い」と答えたマイナス群を比較すると, プラス群の1ヶ月健診における1日体重増加量が有意に多かった( $p < 0.05$ ) (図1)。

また, 初めて児と対面した時の感情(以下, 対面感情)を対児感情評定尺度によりプラスイメージ群とマイナスイメージ群に分類し, 1ヶ月健診における体重増加量を比較した。その結果, プラスイメージ群で体重増加量が有意に高値を示した( $p < 0.05$ ) (図2)。

更に花沢氏の母性理念質問紙により, 産前と産後1ヶ月の母性意識を比較した(花沢は, 母性意識を, 女性が母親になる, あるいは母親であることの自覚とその自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観との両者を包括する概念というように定義づけている)。母性意識の上昇率プラス群は体重増加量が有意に高値を示した( $p < 0.05$ ) (図3)。

一方, 対面感情と母性意識を比較すると対面感情プラス群は産前と産後の母性意識の差が2.39, マイナス群は0で, 有意の差を認めた( $p < 0.05$ ) (図4)。

次に, 虐待する可能性があるとして自己認識している群と, 否定している群について検討したが, 産前・産後の母性意識の上昇に有意の差を認めな

仙台市立病院周産部

\* 同 産婦人科外来

\*\* 同 痴呆疾患センター

\*\*\* 同 産婦人科部長

表1. 坂井氏の述べる注意すべきサイン

1. 出産前	① 母親が妊娠を否認するような言動をとる ② 母親が妊娠に伴う体の変化を受け入れられなかったり、分娩について説明されても恐怖感が薄れない ③ 生まれてくる子どもの兄弟に虐待の既往がある ④ 親自身が子どもの頃虐待されたことがある など
2. 分娩時	① 子どもへの積極的な反応がない ② 子どもと視線を合わさない ③ 夫に出産について協力する姿勢が見られない など
3. 出産後（入院中）	① 子どもを求める行動を示さない ② 子どもに対する否定的な発現がある ③ 産後の抑鬱状態（マニティーブルー）が著明である など
4. 子どものサイン	① 体重の増加が悪い ② 不潔である など
5. その他	① 母親が子どもと一緒にいて楽しそうに見えない ② 兄弟が多く親の負担が大きい ③ 育児の援助者がいない ④ 母親が死後とや遊びなどに生き甲斐を感じ、育児に積極的でない など

かった（図5）。

## 考 察

乳幼児虐待は母性意識の低下などを含む両親の育児へのストレスが大きな要因と考えられる。乳幼児虐待の徴候として坂井らは表1に挙げた様々なサインを示し、産前・産後の両親の意識にその潜在性を指摘し、乳幼児のサインとしては体重増加不良の有無の重要性を述べている<sup>1)</sup>。

我々は乳幼児虐待を早期に発見するためには周産期に関わる医療従事者の役割も重要だと考え、母親の意識調査と新生児の体重増加について検討した。今回の検討では、現在の育児感情だけでなく、産前・産後の母性意識の変化や分娩直後の対面感情も育児に大きく影響することが判明した。即ち、対面感情がプラスイメージになると産後の母性意識が上昇し、虐待が減少するものと考えられた。

ところが、母性意識と虐待に対する自己認識の間には大きなギャップがあることが判った。虐待の発生要因があり、且つ、虐待をしているという自己認識がない母親にこそ、何らかの援助が必要であると考えられた。今回の調査では100名中7名が幼少時に虐待を経験していた。現在の心境についての質問に対して「自分が悪いことは充分分かっているけれど、やっぱり蹴られたり殴られたりするのはいやでした。私はなるべく口で言っただけで済ませようと思います。手をあげたりしないで済むように、小さい頃からしつけだけはきちんとしたいです」という回答があった。これからは典型的な被虐待児の考え方が伺え、躰を重要視するあまり、虐待に発展する可能性を含んでいる。一般に虐待は世代連鎖が起こりやすいと言われ、十分に注意する必要がある。これらのことから、母親の認識にかかわらず、乳幼児の体重増加不良など虐待の発生要因がある対象に、愛着形成へ影響を及ぼす対面感情がプラスイメージにすることが、周産期において必要になると思われる。

虐待のリスク要因を減少するためには、妊娠・分娩をポジティブに受け入れることが大切であり、妊娠中から自分の身体の変化と胎児をプラスイメージで受け止められるような家族単位の指導が必要である。また、対面感情を良くするために、産婦のニーズに沿ったストレスの少ない分娩、産婦と新生児双方を尊重した姿勢が重要となる。仙台市ではこれまでの相談・教育・保健指導事業に加えて、平成13年7月16日から産後ヘルプサービスを開始した。これは退院後一ヶ月以内に家事の手助けがない母子に対して、自己負担金を支払うことにより、家事・育児の援助や相談助言を行うものである。この他に「こども虐待対応マニュアル」<sup>4)</sup>を作成し、教育および医療機関などに配布している。

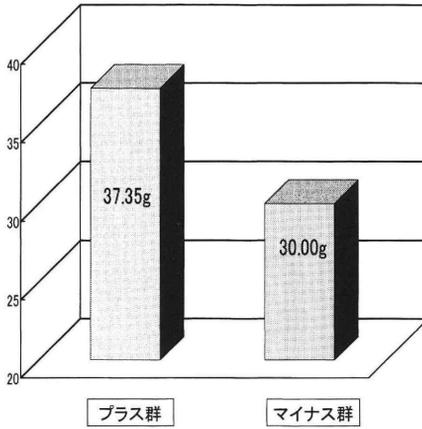
乳幼児虐待は家庭内の問題であり、他人が踏み込むことの難しい面が多いが、医療従事者も周産期における対面感情形成、育児に対するストレスの軽減の手助けになる役割を担っていると思われる。我々も乳幼児虐待防止が実践出来るように社会資源の活用、親業訓練といったNPO資源の活用、相

表2. 花沢氏の母性理念質問紙

	非常にちがう	ちがう	どちらともいえない	そう思う	非常にそう思う
1. 妊娠は女性にとってすばらしいことである					
2. 赤ちゃんを産むことは、女性の権利である					
3. 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである					
4. 赤ちゃんを産んで初めて、子供のかわいさがわかる					
5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみでも我慢できる					
6. 女性だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である					
7. 女性は子供を産むことで、自分が生きた証を残すことができる					
8. どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである					
9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もしかたがない					
10. 子供を産んで育てるのは、社会に対するつとめである					
11. 女性は子供をもつことで、人生の価値を知ることができる					
12. 結婚生活を楽しむためには、子供を作らない方がよい					
13. 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である					
14. 子供を産んで育てることは、自分の成長につながる					
15. 我が子を他人にあずけても、自分の仕事は続けるべきである					
16. 子供を産んで育てなければ、女性に生まれた甲斐がない					
17. 子供がいることで、家庭生活はより楽しくなる					
18. 育児は妻だけでなく、夫もやるべきである					
19. 我が子の成長を見とどけるために、長生きしなければならない					
20. 母親が我が子を自分の一部だと考えるのは、当然である					
21. 育児に追われていると、若さが早く失われる					
22. 我が子のためなら、自分を犠牲にすることができる					
23. 子供を育てるのは、生みの母が最も良い					
24. 育児から解放される時に、人間らしい自由な生活ができる					
25. 我が子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る					
26. 育児に専念したいというのが、女性の本音である					
27. 母親が子供の成長をいきがいにするのは、まちがっている					

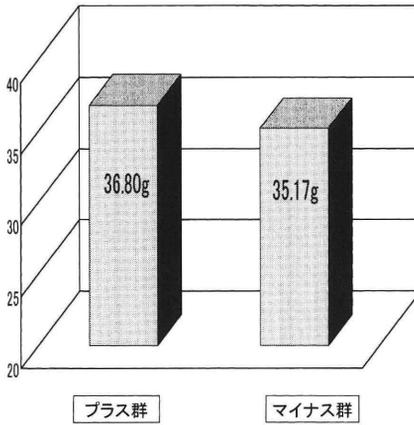
表3. 花沢式対児感情評定尺度

<接近項目>					
あたたかい	うれしい	すがすがしい	いじらしい	しろい	
ほほえましい	ういういしい	あかるい	あまい	たのしい	
みずみずしい	やさしい	うつくしい	すばらしい		
<回避項目>					
よわよわしい	はずかしい	くるしい	やかましい	あつかましい	
むずかしい	てれくさい	うっとうしい	めんどくさい	こわい	
わずらわしい	みっともない	じれったい	うらめしい		



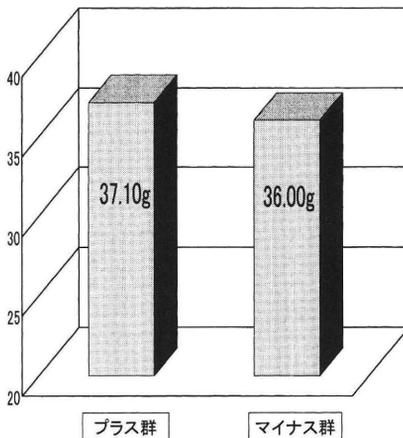
	育児感情がマイナス	育児感情がプラス
平均	30.00	37.35
人数	7	84
標準偏差	8.502	9.794
偏差平方和	506.000	7961.609
t	-8.193	
p	<0.05	

図 1. 母親の育児感情と新生児の1日平均体重増加量



	対面感情が0以下	対面感情がプラス
平均	35.17	36.80
人数	6	85
標準偏差	11.143	9.893
偏差平方和	620.833	8221.589
t	-6.701	
p	<0.05	

図 2. 母親の対面感情と新生児の1日平均体重増加量



	母性意識0以下	母性意識プラス
平均	36.00	37.1
人数	35	56
標準偏差	8.977	10.520
偏差平方和	2740.242	6087.077
t	-2.263	
p	<0.05	

図 3. 母性意識と新生児の1日平均体重増加量

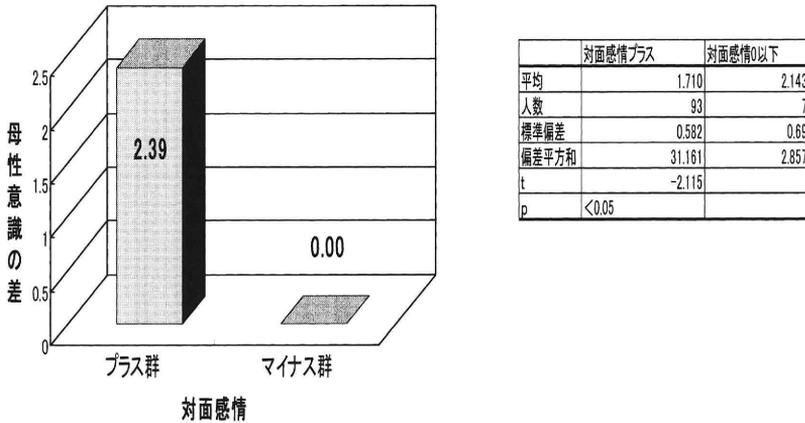


図4. 対面感情と母性意識

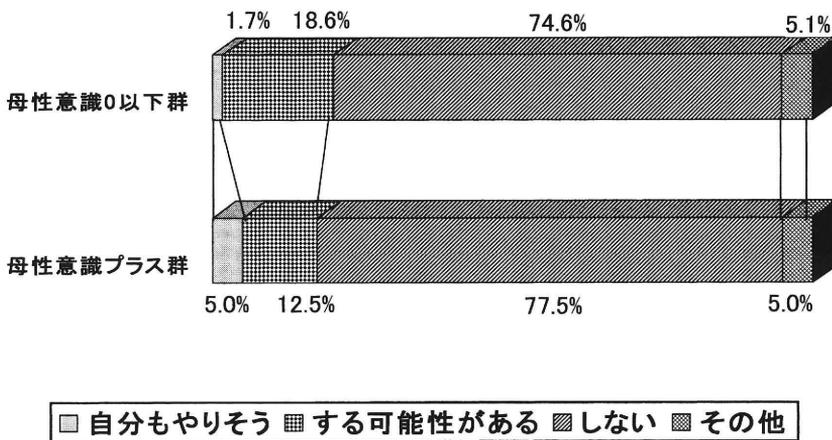


図5.

談が出来るライフラインの紹介，家族計画がしっかり出来るよう夫婦単位の指導などを積極的に行っていききたい。

### まとめ

1. 出産直後の対児感情が良好であると，1ヶ月健診における児の1日平均体重増加量は有意に多い。
2. 産後1ヶ月の育児感情が良好であれば，1ヶ月健診における児の1日平均体重増加量は有意に多い。
3. 産後の母性意識に向上が見られた群は，母性意識が不変もしくは低下した群に比べ，

1ヶ月健診における児の1日平均体重増加量が有意に多い。

4. 対面感情及び母性意識の差にかかわらず，虐待の可能性に対する自己認識に有意の差はなかった。

### 謝 辞

稿を終えるにあたり，小児科の村田祐二先生，医療相談室の大坂純先生，産婦人科の齋藤晃先生，周産部婦長及びスタッフの皆様，アンケートにご協力頂きました患者の皆様へ感謝致します。

(尚，本論文の要旨は，第42回母性衛生学会で発表した。)

## 文 献

- 1) 坂井聖二：周産期の母親への援助—子どもの虐待を予防するために—。社会福祉法人 子どもの虐待防止センター，4-9，1996
- 2) 花沢成一：母性意識の発達。母性心理学，医学書院，東京，pp 14-16，1992
- 3) 花沢成一：母性感情の発達。母性心理学，医学書院，東京，pp 65-69，1992
- 4) 仙台市：子ども虐待対応マニュアル。仙台市健康福祉局 子ども家庭部子ども企画課，2001